

質的研究がめざすもの

—TEA (複線径路等至性アプローチ) とその実習も交えて—

サトウタツヤ #

(立命館大学総合心理学部)

司会・進行 松嶋秀明 (滋賀県立大学)

【企画主旨】

青年心理学を研究する者にとって、質的研究の重要性は論を俟たず、それをどのように進めるか、どのように量的研究との両立や相乗効果を得ていくかは、ずっと長い間、課題になっています。

このセミナーでは前半に質的研究への批判や限界をどのように捉え、それに答えた手法をいかに確立するかについて話をしたうえで、後半にはTEM・TEAの話も交えて2時間のセミナーを行う予定です。

【質的研究；批判にどう答えるか】

質的研究とは、研究の対象について—数値を用いたりカテゴリを用いたりして計数することなく—主に言葉や図などを用いてアプローチする研究方法の総称である。近年、心理学や社会学のみならず様々な分野において研究に取り入れられている。

筆者が学生・院生だった30年前は、自由記述の分析やインタビューの結果は、量的研究を行う前の予備的研究という位置づけにすぎなかった。しかし、現在では、質問紙調査を行う際に連絡先を聞いておき、必要に応じて「深掘り」などと称してインタビューなどを行うことが半ば常識化しており、隔世の感がある。また少し前のことだが、アメリカ心理学会 (APA) が2012年に出版したCooper (編) 『心理学における研究方法』 (全3巻、2500頁) の巻頭に収録されていたのが、ウィリッグ (Willig, C.) による「質的研究のための認識論的基礎の展望」という論文だったことにも少なからぬ感慨を覚えた。この論文のなかでウィリッグは「質的研究とは意味もしくは意味づけ(meaning)に関心を持つものだ」という定義をしている。なお、念のために付け加えておけば、昨今の質的研究は単に手法が質的だというだけではなく、その背景にある人間観や方法論への意識も従来に比べて格段に洗練されている。

現在のところ、筆者は質的研究を「意味を構築する (意味を追求する) 存在としての人間の行為を対象に、研究者が方法に従ってその意味を構成し (意味を追究し) 表現すること」と定義している。ここで研究とは「Something new」つまり何か新しい知識生産を行う活動のことを指す。ただし、そのやり方は自由ではなく、それぞれの学範 (=Discipline) においては、しつけ (=Discipline) に従う必要がある。また、私見では、研究とは分析と総合というプロセスが必要であり、詩などを援用する質的探究 (Qualitative Inquiry) という立場はとっていない (否定もしないが自分は認めないという意味)。さらに、筆者によれば質的研究においては「意味」の二重性が存在する。(1) 「(研究者は) 人間を意味を求める存在と考えるか？」(2) 「(研究者は) 人間が追い求めた意味の意味を求めよう

とするか？」この2つの問いに「Yes」と答えるのであれば、質的研究を行う必然性はある。

さて質的研究に対する批判には、主観に依拠している（客観的ではない）というものや、信頼性や妥当性の担保が難しいということがある。これらの批判は、ジャーナル科学化した心理学において、レフリーという他者が論文を評価するにあたって問題となっているにすぎないと言うことも可能であるが、論文の読者や論文を教育や実践に利用しようとする者にとっても重要な問題であるから、決して無視しておくわけにはいかない側面がある。

こうした批判に対しては、1) 主観的であることではなく臆断的であることが、問題だということ、2) 妥当性や信頼性といった特に調査研究（尺度研究）で使われている概念からの訣別が望まれるのではないかと考えるべきではないだろうか。

| | | | |
|-------|----|-------|-------|
| 客観性 | →→ | 再現可能性 | 反証可能性 |
| 信頼性 | →→ | 確実性 | 監査可能性 |
| 内的妥当性 | →→ | 有意味性 | 真正性 |
| 外的妥当性 | →→ | 転用可能性 | 般化限局性 |

表1に示したような、客観性、信頼性、妥当性（内的、外的）といった概念を他の概念によって置き換えることも考えるべきではないだろうか。

【TEA（複線径路等至性アプローチ）；方法論の開発で見えてくるもの】

TEA（複線径路等至性アプローチ）は、2004年にValsinerの理論をもとに筆者が提唱したもので、現在では日本のみならずブラジル、デンマーク等で、また、心理学に限らず広い分野の研究者によって用いられている質的研究の1つである。

TEA（複線径路等至性アプローチ；TEA）は、時間軸上の変容と安定・維持に着目しその有り様を描く方法論としての「複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Model：以下、TEM）」、対象を抽出するための「歴史的構造化招待（Historically Structured Inviting：以下、HSI）」理論、文化的記号を取り入れて変容するメカニズムを仮定し、理解・記述するための「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：以下、TLMG）」という3つの要素（コンポーネント）を統合・総括する考え方である。方法論的には、

(1) 等至点を経験した人の話を聞くということが、HSIである。

(2) HSIでお呼びした方のストーリーを二次元で描くのがTEMである。

(3) 本人の経験において、何か選択肢が生まれた点が分岐点であり、分岐点における自己を記述するのがTLMG(発生の三層モデル)である。

TEA（複線径路等至性アプローチ）では、妥当性や信頼性にこだわるのではなく真正（Authentic）な研究を目指すための工夫が実装されている。

臆断を取り除くための工夫の1つがトランスビューという考え方である。これは、TEMを作成しながらインタビュイーと繰り返し話をする中で、お互いの理解を融合していく試みである。また、EFPを、1st.EFPと2nd.EFPに概念的に分離し、前者は研究焦点としてのEFP、後者がトランスビューによって達成される融合的なEFPと整理することによって、研究者の臆断を低減する仕組みを作っているのである。

以上、本講演では、上記の内容を講演するだけでなく、TEA（複線径路等至性アプローチ）の実習を組み込み、実際に体験してもらいたいと考えている。

【参考文献】 サトウタツヤ 2013 『質的心理学の展望』新曜社